

MUSASHINO^{Vol.88} *for* TOMORROW



武蔵野音楽学園 創立八十周年

巻 頭

今、音楽の原点を考える

一柳 慧

海外音楽事情

一つのスタイルが主流である時代は終わった

インゴ・ゴリツキー

January 2009
vol.88

明けましておめでとうございます。

学校法人 武蔵野音楽学園 理事長 福井 直敬



皆様には、ご健勝にて平成21年の佳き初春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

さて、新しく迎えた年は、昭和4年(1929)年に呱呱の声をあげた武蔵野にとって、創立80周年の記念すべき年にあたります。関係者一同、建学の精神「和」のもとで「音楽芸術の研鑽」と「人間形成」を教育の方針として掲げ、教育研究の改善・向上と社会への貢献に、また気持を新たに一層の飛躍を図る決意であります。

武蔵野音楽大学が平成18年度、音楽学部開設した「ヴィルトゥオーソ学科」は、その特色あるカリキュラムで注目を集め着々と所期の成果をあげておりますが、いよいよ本年、完成年度を迎えます。ここで熱心に学習に取り組んできた学生のための一層高度な研究の場として、平成22年度から大学院修士課程に、新たな専攻あるいは

コースを新設する予定で、現在準備を進めております。

大学設置基準によってFD(教員の授業内容・方法改善の組織的な取り組み)が義務化されたことに伴い、これまで行ってきたいくつかの試みを、さらに大きな輪へと広げなければなりません。本学は昨秋、これも法令によって定められた第三者評価を受検しましたが、そのための報告書を作制する課程でFDについても活発な議論がされ、各専攻、あるいは部会ごとの研修、授業見学、あるいは教員の相互評価などのさまざまな取り組みを始め、その結果を各授業やレッスンの向上、改善に効率的に活かすよう検討を重ねております。

教育職員免許法の改正によって、教員の免許状は10年ごとの更新が必要となり、そのためには所定の講習を受

け、教員としての適否の認定を受けなければならないこととなりました。従前から教職課程を置いている本学としては、このアフターケアも社会的責務のひとつと考え、今夏からこの更新講習会を実施するための届出準備を行っています。

武蔵野では、独自の「福井直秋記念奨学金」の制度を持ち、毎年度約80名の者に返還義務のない奨学金を給付してきましたが、平成21年度から音楽学部の優秀な新入生約30名に対し、同じく返還義務のない「学修奨励金」(入学金相当額)を支給する制度を新設いたしました。

本年も、武蔵野音楽大学附属高等学校、同幼稚園ともども、本学園に対し皆様の倍旧のご支援、ご鞭撻をお願い申し上げます。



▲ 武蔵野音楽学園入間キャンパス

今、音楽の原点を考える

● 一柳 慧 ● 作曲家・ピアニスト ●

私たちは新しい音楽を生み出せるだろうか、と問いかける一柳先生。社会的な成熟期を過ぎた今、どのような姿勢で音楽に取り組むか、出来上がったものを対象とするのではなく、原点に戻ってもう一度考えなおし再出発しよう、と訴えられています。



芸術音楽界の今後

あらゆるものは成熟期に達すると、成長が止まると言われる。そしてその時期を過ぎると次第に力を失い衰退してゆく。とは言え、人間の歴史はその繰り返しの上に形成されてきているのもまた事実である。

最近の日本でいえば、第2次大戦の敗戦で全てを失った貧困のどん底から立ち上って、戦後の高揚期を創り出し、そのピークを迎えたのが、多分1980年代だったと言えるだろう。

音楽界を例にとれば今完成されて

いる数多くの新しいホールや、オーケストラなどが出揃ったのがその頃であったことを見てもわかることである。1990年代後半以降は、一部の室内アンサンブルなどを除くと、目立った新しいオーケストラやホールは誕生していない。日本が欧米諸国のような社会的成熟期を80年代に達成したかどうかという点と必ずしもそうとも言えない面も指摘できようが、しかし、戦後のひとつの大きなうねりが、その頃に終わったことは間違いないだろう。

今、私は日本の現状について触れたが、明治以降、私たちが手本とし、鏡としてきたヨーロッパ音楽も最近では似かよった状況を呈し始めていると言えないだろうか。約100年前、それまで数100年にわたって繁栄を誇ってきた調性組織が行き着くところまで行き着いた末に崩壊した。そして、20世紀後半は、もはやひとつの歴史的変遷としては捉えられない多様に枝分かれした音楽が次々と登場してくる。ただそこにはまだ、2つの世界大戦で疲弊し、荒廃した後の人類にとって、新しい価値観を積極的に求めてゆこうとする精神的高揚があった。

しかし、メシアンやケージやクセナキスやシュトックハウゼンらが亡くなったことでそれも過去のことになりつつある現在、もっぱらクラシック音楽の反復に明け暮れる芸術音楽界の今後にどのような可能性が残されているのか、私



一柳 慧
(Tosbi Ichiiyana)

1933年生れ。作曲家、ピアニスト。10代に2度、毎日音楽コンクール(現・日本音楽コンクール)作曲部門1位。'54年渡米、ニューヨークに滞在しレジョン・ケージに師事し'61年帰国。自作及び日欧米の新しい音楽の紹介と演奏を行い、さまざまな分野に強い刺激を与える。60年代から現在に至るまで、常に日本音楽界の中心にあって活動を続けている。

海外において、エリザベス・クーリッジ賞('55年)、フランス政府芸術文化勲章('85年)等を受章。国内では、4回の尾高賞、毎日芸術賞('89年)、サントリー音楽賞('02年)等の他、紫綬褒章('99年)、旭日小綬章('05年)を受章、'08年には文化功労者に選ばれる。作品は、3つのオペラ作品「モモ」('95年)、「光」('03年)、「愛の白夜」('05年)の他、「交響曲 ベルリン連詩」他 6曲の交響曲、ピアノ、ヴァイオリン協奏曲、雅楽「往還楽」「道」、室内楽作品、電子音楽など多数。著書に「音を聴く」(岩波書店)、「音楽という営み」(NTT出版)など。

「アンサンブル・オリジン」の音楽監督、コンサート・シリーズ「千年の響き」芸術監督等も務め、多くの海外公演も行った。現在、神奈川芸術文化財団芸術総監督。



▲ 武蔵野音楽学園入間キャンパス図書館

今、音楽の原点を 考える

Toshi Ichibanagi

私たちはこのことに心してのぞまなければ、未来への展望はなかなか開けてこないのではないだろうか。ここでは詳しく述べる余裕はないが、このように考えてみると、21世紀に音楽を通して社会人として生きようとする人達にとっては、これからが正に正念場ということになるかもしれない。それは私の若い頃と比べた場合、まだ発展途上だった故の恵まれていた時代とは、かなり隔たりが生じてきているように見受けられるからである。



閉塞化した 音楽界

私の若い頃は、今はやや社会の片隅に追いやられている感のある作曲や、現代音楽の音楽会も隆盛を極めていた。私が1961年にニューヨークから帰国して参加した20世紀音楽研究所主催の前衛音楽のフェスティバルも、私が草月ホールの主催で個人的に行った作品演奏会も、62年に来日したケージとテュードアの数回のコンサートも、私が武満徹と2人で企画して行った大ホールでの「オーケストラル・スペース」もいずれも超満員の盛況であった。そして極め付きは、69年に代々木のオリンピック体育館で行った「クロストーク・インターメディア」フェスティバルであろう。この催しはインターメディアというタイトルからもおわかりのように、当時の最先端の技術であっ

たコンピューター音楽や映像を駆使した2日間にわたる前衛芸術のフェスティバルであったが、両日で1万6千人の観客が訪れている。この時代はメディアの関心が高く、各新聞や雑誌がこぞって大きく取り上げていたことを考えると、創造的芸術にとって刺激に富んだ夢のような時代だったと言えるだろう。そのように新しい芸術も活況を呈していた時代と比べると、最近の状況はかなり閉塞したものになってきていると感じるのは私だけではないだろう。今は音楽の発展的将来図を描くことも容易ではないように思える。この原稿のタイトルを、「音楽の原点を考える」としたのも、そのことと関連している。私には自分の眼で、そして自

分の立場で、もう一度音楽を根本から考え、問い直し、場合によってはその歴史観を読み直すことも必要になってきているように思えるからである。どのようにそれを行っていくかは、それぞれの人が自分の立場で考えるしかないわけだが、ここで私が述べていることをわかり易く整理する上で、少し視点を変えて、わが国の伝統音楽が抱えている問題に触れてみたい。それは次のようなことがあるからである。



原点に戻って 再出発

私たちは千年以上昔から世界に誇



▲ 武蔵野音楽大学江古田キャンパス

れるさまざまな伝統音楽を持っている。それらはたとえば雅楽や声明や能楽や歌舞伎のような総合芸術と言ってもよい性格を有しているものから、琵琶や尺八や箏や三味線音楽のような個々の楽器主体の音楽まで多岐にわたっている。これらの音楽は長い変遷の年月を経て、今は見事に完成されている。だがここから更なる新しい発展や成長を期待出来るか、ということになると、かなりむずかしいと言わざるを得ないだろう。私のような作曲家は、時折これら伝統音楽の演奏家やプロデューサーから新しい作曲を依頼されることがある。私も日本人として当然これらの音楽に大きな関心を寄せており、できれば新しい作品を創りたい気持は山々ある。しかし、今も述べたように、これらのいずれの音楽も完成され尽くしているため、そこに何か付け加えて未知なものを創作するのは容易ではない。ましてやこれら古典として定着している伝統音楽を発展成長させたり、凌駕するようなものを創り出すことは更に困難であることは言うまでもない。

しかし、作曲家として、作曲の要請があれば、何とかその期待に応えたいと思うのは私だけではないだろう。伝統音楽に携わっておられる方々の中には、このままではこれらの音楽は、博物館の音楽に終わってしまうという危機感を持っておられる方も決して少なくないようにお見受けする。それでは新しい作曲を行う場合、どのような姿勢で取り組んだらよいのだろうか。

これはそれぞれの作曲家が、自分の解決法を見出すしかないように思われる。完成、完結されている音楽に、それ以上付け加えるものを探すのが困難であるなら、伝統音楽の原点に立ち戻って、もう一度考え直したり、歴史や変遷を読み直した上で、再出発することが不可欠なのではないだろうか、というのが私の場合の対応策である。つまり、出来上がったものを対象



▲室内合唱リハーサル (J.ヒューリン客員教授)

にするのではなく、これらの音楽が、まだ形を整えずに未分化な状態で存在していた頃へ視点を戻して再出発するしか前へ進む道は見出しにくいのではないかと私は考えている。それ故その全てが未分化のまま混在していた時点が、私にとっての原点ということになるだろう。ここでは詳しく述べることはできないが、私にとってその原点とは、西暦752年に奈良の東大寺で行われた大仏開眼供養の催しということになる。それは、当時のアジア諸国から参集した多様な音楽の一大祭典であり、その後、それらの音楽が、どのような日本化の道を辿り、日本の音楽として定着していくのかははっきりする以前の段階であったと言ったらよいだろう。



新たな筋道の再構築

西欧ではよく、音楽に行きづまりを感じたり、反省を必要としたりする折に、「バッハに還ろう」と言うことが言われる。ヨハン・セバスチャン・バッハは、音楽の父と呼ばれることもあるように、近代西欧音楽の原点として見られていることも多いようだ。それだけ

その存在が普遍的で大きいことを示しているわけであるが、ここでも問われるのは、何が今の私たちにとって原点なのか、ということになるだろう。閉塞化した状況の中で、将来への見通しが立ちにくい現在、バッハが新たなよりどころとして蘇ってきても不思議ではないが、時代が移ると、バッハの見方も変わってきていることを知ることは大事である。このことはバッハが、近代西欧と、それ以前の時代の境目に位置する作曲家であったことと関係しているように私には思われる。

そこでは少なくとも二つの事が、今音楽を考える上で見逃せない要素として存在する。

そのひとつは音律の問題である。





▲ レッスン風景 (E.オブラストワフ客員教授)

バッハの時代には、今私たちがピアノで聴いているような平均律はまだ定着していなかった。それまでの時代に使われていた、たとえばピタゴラスやミーン・トーン、ヴェルクマイスターといったいくつかの音律を調整しながら音階や調性や和声づくりを行っていたと思われる。そこには平均律が大手

を振って跋扈する後の時代の音楽とは、響きへのアプローチに大きな、また繊細な違いがあるように思われる。

もうひとつは、今はそれが当たり前、それなくしては音楽が成立し得ないかのように言われている芸術家個人の自己主張や自己表現の問題である。バッハは果して今日考えられているよう

な自己主張や自己表現のために、自分の音楽を創っていたのだろうか。それは私には、バッハの敬虔で謙虚な佇まいをもつ音楽を聴く度に沸き起る疑問である。

原点に立ち返って考え直すということは、過去につくられた既存の概念を鵜呑みにするのではなく、見逃されていたり、気付かなかった要素を自分なりに発見して新たな筋道を再構築することであろう。芸術の自己主張や自己表現に関して言えば、もともとそのような近代西欧的な発想がなく、共存や受容や相互浸透など、日本なりの方法論で行ってきた領域だけに、これからの芸術を考える上でそれは西欧にとっても大きな問題提起になる可能性がある。

芸術音楽が将来へ向けての展望を築けるかどうか、今はむずかしい状況に直面しているが、それは新たな目標の創造を目指すことでもあり、挑戦し甲斐のある対象だと言うことができるだろう。

音楽の万華鏡 ⑥

扉絵に描かれた空間の音楽

16世紀末から17世紀前半にかけて、ドイツの作曲家たちは誕生したばかりの新しい音楽様式を習得しようとイタリアを目指した。また、ドイツ各地の宮廷も、ドレスデンのザクセン選帝侯宮廷のように、イタリア人音楽家を雇い入れていく。ちょうどこの時期に北ドイツの町ヴォルフエンビュッテルの宮廷を中心に活躍したミヒャエル・プレトリウス(1571頃-1621)は、作曲家、理論家、オルガニストとしてきわめて多面的な活動を展開した。直接イタリアに行く機会には恵まれなかったが、ハインリヒ・シュッツ(1585-1672)を始めとす

る当時のドイツの同僚作曲家たちとの交流や、とくにドレスデン宮廷での滞在を通して新しい様式を身に付けていった。この絵は、彼の主著である音楽百科事典『音楽大全』(全3巻、1614/15-1618)の第2巻『楽器誌』の付録、1620年に出版された図版集『楽器総覧』の扉絵である。しかし、同じ宮廷で活躍したエリアス・ホルヴァイン(1612-32活躍)によるこの木版画は、すでに《シオンのミューズたちによるモテットとラテン語詩篇曲集》(1607)の扉絵として使われている。歌手と楽器奏者が左右と下方の3箇所に配置され、聖歌隊席には左から右にかけて、詩篇く来たりて主を喜び歌わん(この曲集の第44曲)の楽譜が記され、その下にシターンやリュート(左)、リコーダーやシャルマイ(右)といった楽器が描かれている。プレトリウスが代表作《シオンのミューズたち》(全9巻、1605-15)の序文で詳細に指示した演奏



方法の中心をなしているのが、この絵のようにオルガン、声、楽器のアンサンブルといった異質の響きを結合して教会の音響空間を華麗に満たすコンチェルト様式である。この絵が何度も使われたのは、この様式がバロック時代の根幹となることを彼自身予感していたためであろう。 寺本まり子 (本学音楽学教授)

海・外・音・楽・事・情

一つのスタイルが主流である時代は終わった

●インゴ・ゴリツキー教授(オーボエ)●

演奏家を目指す若い学生を励ましたい、とゴリツキー先生が一文を寄せてくださいました。演奏スタイルについても変化の激しい今、先生の暖かいメッセージをお伝えします。



フルートから
オーボエへ

14歳の時、両親が選んでくれた楽器はフルート、当時私はオーボエという楽器の存在すら知りませんでした。それから数年間、定期的な個人レッスンを受け、高校を卒業する頃にはフルートの古典のレパートリーはほとんど吹けるようになっていました。

兄弟のうち二人がフライブルク音大在学中で、弟のヨハネスはA.タイヒマニス先生について、兄のダインハルトはU.コッホ先生についていたので、私はG.シェック先生の入学試験を受けました。もう一つの専攻楽器(ピアノ)はE.ビヒト=アクセンフェルト先生につきました。要するに副科ではなく、主科が二つあったということです。

未だに自分には理解できない理由で、そのうちフルートの調子が最悪になって、先生もお手上げ状態になってしまいました。フルートに対する私の純愛が、その逆の憎しみみたいな気持ちに変わって行き、音楽をやめるか全く違う楽器に転向するかという二者択一の状況に陥ってしまったのです。弟のヨハネスの助言は「オーボエ奏者は少ないからオーボエを習ったら! (当時は

本当にそうでした)」…そして、その道を行くことを決心したのです。

F.プラート先生のオーボエ・クラスに転入、素晴らしい初心者向けのレッスンを受けることになりました。アンブシユアなどに関する基礎などを丁寧に教えてもらい、実際に現在までそこで学習したことを生徒に教えています。



再びフルートから
オーボエへ

これらの出来事はすべて1960年の前期のことでした。

やがて夏休みに入り、フルートに対する愛情が戻ってきました。夏休みでシェック先生と大学の授業のプレッシャーがなかったからかもしれません。

もう一度フルートに挑戦したくなって、デトモルト音大のH.-P.シュミッツ先生のクラスを受験、…だが、短期間の間にフライブルク時代と同じ問題が発生して、もう一度オーボエに転向すべきか悩み始めました。シュミッツ先生にそのことを手紙に書いたところ、ものすごくシンプルな返事が電報で届きました。「熱心にフルートを練習する以外にもすべきでない!」…それにもかかわらず、私はすぐにオーボエのH.ヴァインシャーマン先生に連絡を取りました。

先生は私をクラスに受け入れて、再出発のチャンスをもう一度与えてくれました。シュミッツ先生は当時「転向によって問題から逃げようとしているだけだ」と私の決断に反対でした。そして、クラスへ戻ることは禁止されました。今



インゴ・ゴリツキー
(Ingo Goritzki)

ドイツのオーボエ奏者。はじめフライブルク音楽大学でフルートをグスタフ・シェックに師事。その後オーボエに転向、デトモルト音楽大学でヘルムート・ヴァインシャーマンに師事した。バーミンガム、プラハ、ジュネーヴなど国際音楽コンクールで上位入賞。1966年～'69年バーゼル交響楽団、'69年～'76年フランクフルト放送交響楽団の首席奏者を務めたほか、ハノーファー音楽大学とシュトゥットガルト音楽大学で教鞭をとった。ソリストとして国内外の多くのオーケストラと共演している。'02年ロットヴァイル文化財団芸術賞受賞。武蔵野音楽大学客員教授。



▲ヴァインシャーマン氏(左)とゴリツキー教授



▲J.C.ジェラル、I.ゴリツキー、R.ヴラトコヴィチ、D.イエンセン、U.ローデンホイザー

考えてみると、その禁止令は、私がその後また人生の道に迷っているときに、とにかくもう戻れないから、今度こそ貫きとおさなければいけない、という意識を持たせてくれました。



「助けて!」と叫んだ 気持ちを今に

すべては私が20代の頃でした。芸術家という職業でもライバルが多く、プレッシャーが信じられないほど強くなっている今の時代ではなかなか考えられないことですが、出発点が遅くても、芸術家という道に進むことがまったく不可能ではないということも立証できたと思っています。そのチャンスを与えてくれたヴィンシャーマン先生とはいまだに特別な関係を保っています。彼がこのような人生を可能にしてくれたからこそ、私は後の人生で、若い人が相談に来た時には必ず演奏を聴いて、出来るだけ良い助言をするようにしています。…当時「助けて!」と叫んでいた自分を見ている気持ちでその若い人に接するようにしています。

フルートからオーボエに転向したというこの人生、この運命が私に辛い思いをさせた償いとして、いろいろな世代の有名なフルート奏者と共演できるようにしてくれました。A.ニコレ、A.ジョネ、

K.ツェラー、P.L.グラーフ、金昌国、P.マイゼン、J.C.ジェラル、R.グライス、F.レングリ、D.フォルミザーノ…

その後の大学生生活と音楽家としての人生は非常に“規則正しく”進みました。デトモルト音大を卒業した後には一年間パリに留学して、P.ピエルロのもとでオーボエを、そしてL.デカーヴのもとでピアノを勉強しました。そして、3年間バーゼルの交響楽団で音楽監督のW.サヴァリッシュのもとでソロ・オーボエを務め、その間、P.ザッハー率いるバーゼル室内合奏団で頻繁にソリストとして活動させてもらいました。

バーゼル時代にはP.ブーレーズと知り合い、モーツァルトのオーボエ協奏曲K.314をザルツブルグで発見したB.パウムガルトナーとも知り合いになりました。パウムガルトナーとその協奏曲を共演する予定はありましたが、残念ながらそれはもう実現しませんでした。この曲の問題点を彼と話し合いたいという願望は無念に終わってしまいました。



変化は 新しい刺激と挑戦

バーゼルの後に7年間フランクフルトのヘッセン放送響でソロ・オーボエを務めました。オーケストラを心から愛していますし、運命が私をこのような素

晴らしい楽団で古典の音楽と近現代の音楽を体験させてくれたことを誇りに思っています。今の時代では、世界中のオーケストラ状況が悪化しており、生き延びる唯一の手段として、合併という道を選んでいきます。

最近ではザールブリュッケン放送響とカイザースラウテルン放送響が合併して“ザールブリュッケン放送管弦楽団”として南ドイツ放送局の傘下に入りました。このような形でドイツのオーケストラ事情はどんどん変わっていきつつあります。

1970年代の初めにE.インバルがフランクフルトの音楽監督に就任して、私は少なくともあと数年はこの職場にいたかったのですが、1976年にハノーファー音大に呼ばれ、それも自分の運命とみなし、その後の10数年をハノーファーで生活することを決心しました。ハノーファー時代に金昌国氏と出会い、初めて日本を訪問することになりました。彼の長男である青山聖樹は当時私のもとでオーボエを始めて、現在は武蔵野音大で教えています。

ハノーファーでは幸運なことにK.トゥーネマンとH.ダインツァーがファゴットとクラリネットの先生をしていました。当時の私のクラスにはA.マイヤー、C.ヴェッツェル、青山聖樹、F.メンツェル、J.ヴァルヤッカ、W.パレツァ等優秀な生徒が揃っていました。1989年にシュトゥットガルト音大に移るオファーがありました。人間にとって変化というのは新しい刺激であり挑戦だと思い、シュトゥットガルトへ行くことを承諾しました。

シュトゥットガルトでは室内楽のチャンスがたくさん生まれました。友人のU.ローデンホイザーと一緒に“シュトゥットガルト音楽アカデミー”を創立し、“アンサンブル・ヴィラ・ムジカ”として上記の仲間達と頻繁に舞台を踏むことになりました。もうひとつ自分が創立した音楽祭はロットヴァイル市の“ゾンマーシュプロッセン”(直訳:ソバカス、ドイツ語では夏



▲武蔵野でのレッスン風景

に芽生える新鮮な若い芽のことを言う)であって、40年以上持続しています。



未来の 先駆者たちへ

シュトゥットガルト音大を退職する時期に私にとって特別うれしい出来事がありました。武蔵野音楽大学の福井学長先生の好意により、2008年10月と11月に客員教授として長いブランクの後に再び武蔵野音楽大学で教えることが実現しました。

建物・レッスン室・街並みなどは昔の名残があってとても懐かしく、そして、歓迎してくれた膨大な人数になっていたオーボエ・クラスは感動的でした。世界的にオーボエの演奏スタイルは変

わりつつあるなかで、大勢の若者がこの楽器に興味を持ってくれるのは大きな喜びです。

長年日本でも主流だった、いわゆる“ドイツスタイル”はもう存在しませんし、ヨーロッパでも“フランススタイル”との区別はなくなってしまいました。ドイツの主流オーケストラの首席にフランス人が座っているのが現実です。様々な演奏スタイルがなくなって来たのを残念に思う気持ちもわかります。しかしその結果として、楽器の独特な奏法に執着心を持つよりも、音楽的な調和という大切な進歩が得られたと思います

す。今はまだ孤立しているアメリカのオーボエ奏法ですが、ヨーロッパ同様、境界線のない世界に近づく時代もくると思います。

主流である一つのスタイルという時代は終わりました。自分の楽器で、自分の奏法で、音楽的な意思・アイデアを一番うまく表現できる者が未来の先駆者です。それはオーケストラ奏者、ソリスト、そして室内楽奏者も同様であり、このことを理解して、迷わずにそれを目指してほしい、これが武蔵野音楽大学と世界中の学生に対するメッセージです。

(訳：青山聖樹)



▲アンサンブル・ヴィラ・ムジカ(右端ゴリツキー教授)

音・楽・余・話・

恩師ゲンリッヒ・ネイガウスのある誕生日、モスクワ音楽院とグネーシン音楽学校の彼の生徒をはじめとする30人以上の弟子たちが彼の家に集まった。私たちは恒例のシャラーダ(ジェスチャー・ゲーム)を楽しんだ。私たちのグループの題は「アイダ」であった。そこでラクダに乗る役をしたのが一番体重が軽かった私で、毛布をかぶりラクダの役をしたのがリヒテルとマリニンであった。相手のグループが、私たちが何をやっているのか分からないでいると、リヒ

リヒテルとの出会い

テルはピアノに向かい、アイダの様々な場面の音楽を弾き始めた。皆は称賛し「アンコール、アンコール」と叫び、リヒテルはそれに応じてワーグナー、ヴェルディ、プッチーニなどの様々なオペラを演奏した。

これがリヒテルと私の初めての出会いであり、後にモスクワやソフィアで、お互いの住まいをししばしば行き来するほど近い間柄になるとは、予想もしなかった。

その後、リヒテルが官僚的なマネージャーよりも同門に学んだ友人のアシスト

を希望したことから、私と妻のジュリアは、彼のブルガリアやその他の国々への演奏旅行に同行し、素晴らしい時を共に過ごした。彼がプロコフィエフのピアノ協奏曲第1番を演奏した時には、演奏者の汗が飛び散って来るような最前列に座り、ピアノシモからエスプレシーヴォなクレッシェンドをする部分で、音楽と共に彼の目玉が飛び出して来る様を目撃したのも印象的な思い出である。

(訳：重松万里子)

コンスタンティン・ガネフ

(本学客員教授)



① 本年度も芸術の秋にふさわしい多彩な公開講座・コンサートシリーズが開催されました。まずは武蔵野音楽大学室内合唱团演奏会(10月6日ベートーヴェンホール)。フライブルク音大で教鞭を執るヴィンフリート・トル本学客員教授の指揮のもと、ブラームス「ドイツ・レクイエム」を、作曲家自身の編曲によるピアノ連弾伴奏にティンパニを加えた版で演奏。管弦楽の伴奏とは異なった透明なハーモニーを聴かせ、味わい深い名演となりました。第35回を迎えたパルナソス多摩コンサートシリーズは、エレナ・オブラストワ本学客員教授のメゾ・ソプラノ・リサイタル(10月20日シュェibelトール、ピアノ＝瀧田亮子)が行われ、洗練されたフランス歌曲を披露①。

さらに世界的名手、アブデル・ラーマン・エル＝バシャ氏のピアノ・リサイタル(10月23日ベートーヴェンホール)。ベートーヴェン、ラヴェル、ショパンを格調高く弾き、満員の会場から万雷の拍手が②。続くオーボエの巨匠、インゴ・ゴリツキー本学客員教授のリサイタル(11月10日ベートーヴェンホール)では、武蔵野の指導陣、青山聖樹(オーボエ)、岡崎耕治(ファゴット)、ツォルト・ティバイ(コントラバス)、岡崎悦子(ピアノ)らとともにバロックから現代作品まで幅広いアンサン



実り豊かな秋の公開講座・コンサートシリーズ

ブルのレパートリーを聴かせ、オーボエの至芸を堪能させてくれました③。



アルヌルフ・フォン・アルニム客員教授ピアノ・リサイタル(11月13日バッハザール)は、シューマン、ブラームスなど得意とする作曲家を伝統的解釈で演奏④。ゴリツキー客員教授のオーボエ公開セ



ミナー(11月14日江古田キャンパス 447室)は、「1777年の疑惑の解明?!?」と題してモーツァルトのオーボエ協奏曲K.314の問題点、フルート協奏曲との比較等を実演を通して解き明かすという興味深い講座となりました。カールマン・ベルケシュ客員教授によるクラリネット・リサ

イタル(11月19日ベートーヴェンホール)は、本学教員を交えてモーツァルトの五重奏曲、ブラームスのソナタ、グラミー賞室内楽部門ゴールドメダルを受賞したバルトークのコントラスツなどを演奏、幅広い音色が印象的なコンサートでした⑤。



アメリカ合衆国沿岸警備隊バンド演奏会(12月3日ベートーヴェンホール)は、米国ならではの華やかなサウンドが披露された他、12月6日には 東京芸術劇場 シアターオペラ Vol.3 マスカーニ：歌劇《イリス》で本学合唱団が読売日本交響楽団と好演するなど、実り豊かな秋のシリーズとなりました。またこの他、ヴァルトウオーソ学科の学生によるニュー・ストリーム・コンサートⅧ(11月15日トッパンホール)、学生による室内楽の夕べ(11月12日ゆめりあホール)など⑥、多くの学生が出演し、日ごろの研鑽の成果を発表、会場は暖かい拍手に包まれました。



豊かな音色と笑顔に彩られた ミューズフェスティバル



生まれ変わりました。音楽高校ならではの特色ある催しとして、今後、新たな伝統として受け継がれていくことでしょう。

江古田キャンパスでは第57回ミューズフェスティバル（10月31日～11月3日）が「SMILE～笑顔の輪～」のテーマのもと

催されました。前日祭は武蔵野音



げられました。さらに、ベートーヴェンホールでは青山聖樹氏（オーボエ／本学准教授）、岩津勢伊子

女史（ピアノ／本学講師）の演奏会も行われ、双方ともに格調高い演奏が祭典に一層の華を添えました。また、各クラブや有志団体がバラエティに富んだ模擬店を出店、売切れとなる商品も出るほどの盛況でした。

“ミューズフェスティバル”の名の通り、音楽に彩られた祭典は今年度も大成功のうちに幕を閉じました。



本学園の“ミューズフェスティバル”が、昨年10月・11月に入間、江古田の両キャンパスで開催され、深まる秋をあざやかに彩りました。

第33回入間ミューズフェスティバル（10月25日、26日）のテーマは、「共鳴」「音色」を意味するフランス語を用いた「La Sonorit ! ～輝く音色の祭典～」。このテーマに相应しく、幼稚園、高校、大学がそれぞれの個性を発揮、また協力・連携して日頃の努力と研究の成果を競いました。招待演奏には永田順子女史（ピアノ／本学准教授）、岡崎耕二氏（トランペット／本学卒）の両氏を迎え、またシンフォニックウィンドオーケストラやフルートオーケストラ、管弦楽など多彩なプログラムが展開されました。また、附属高校名物として毎年好評だった、3年生によるクラス劇は、今年度から生徒一人ひとりの「演奏発表」として

武蔵野音楽学園・入間ミューズフェスティバル
IRUMA MUSE FESTIVAL
武蔵野音楽大学入間学友会・武蔵野音楽大学附属高等学校・武蔵野幼稚園



大恒例の仮装パレードで華々しくスタートし、江古田の街はお祭りムードに早変わり。続く本祭では学生たちの活気の溢れる演奏や展示が各会場で繰り広



管弦楽団合唱団&ウィンドアンサンブル演奏会



音楽学部の学生を主体として編成される本学のオーケストラ、ウィンドアンサンブル。昨年11月より、それぞれの団体が勉学の集大成として、学内外のホールで次々と公演を繰り広げました。

まず、2年生中心による管弦楽団が、K.ベルケシュ教授の指揮で、11月16日入間市立中央公民館主催による「市民コンサート」に出演。続いて28日には、シンフォニック ウィンド オーケストラ(指揮:前田淳講師)が、入間キャンパス バッハザールで演奏会を開き、前田氏の指導のも

とで培った成果を澁刺と響かせました。

さらに、恒例の管弦楽団合唱団の定期演奏会が、12月9日東京芸術劇場 大ホール(写真上)、10日にはバッハザールで開催され、内外のプロオーケストラとも多くの共演を重ねる北原幸男教授の指揮により、ブラームスの「大学祝典序曲」を力強く奏し、次いで楽壇で華々しく活躍中の山口道子、森永朝子、水口聡、谷 友博の4氏をソリストに迎えて、年末に相応しいベートーヴェンの「第九」を演奏(合唱指導・指揮:松井 徹、J.

ヒューリン)。ソリストの熟達の歌声と学生たちの清新なハーモニーが共鳴し、聴衆から拍手喝采を浴びました。

また、ウェストヴァージニア大学名誉バンドディレクター D.ウィルコックス教授率いる本学ウィンドアンサンブルのコンサートが、12月16日東京オペラシティ コンサートホール(写真下)、次いで20日練馬文化センター 大ホール(練馬区文化芸術振興支援事業 主催:練馬区)で行なわれました。ギロー「ポーランド騎兵隊序曲」、ニールセン「マスカレード・オーバーチュア」、グランサム「バロン・シメティエールのマンボ」などのプログラムで、ウィルコックス氏とともに創り上げた音楽性豊かな柔らかなサウンドを会場いっぱいに響かせました。



江古田キャンパス、ベートーヴェンホールのパイプオルガンが、2度目のオーバーホールの時期を迎えました。2009年5月から10週間にわたり、3名のドイツ人技師

ベートーヴェンホール、パイプオルガン修復

を中心に実施します。作業は4,140本のパイプすべてを取り外すことから始め、内部機構を分解し清掃、修復、調整を行う大規模な作業で、組み立て工程の初期状態にまでもどし、再組み立てをしながら整音、再調律をして終了します。

1961年(昭和36年)に本邦初、アジア圏最大のコンサートオルガンとして、本年創立127年の歴史を有するクライス社が建造しました。落成式のウィルヘルム・ケ

ンプの厳粛な演奏(写真)が、今でも語り継がれています。本学のオルガン科の教育はもとより、カール・リヒター、ピエール・コシュロー、ヘルマン・ケラーらの名演や、卒業式や入学式の感激のシーンを支えてきました。歴史的なネオバロックスタイルの柔らかな音色は、入間キャンパス、バッハザールのユニバーサルな大オルガンと競い合い、今後も武蔵野の伝統の響きを育んでいくことでしょう。



創立80周年記念 オペラ公演予告

武蔵野音楽大学では、正規のカリキュラムにオペラコースがあり、内外の著名な指導者のもとで歌唱力、基礎演技などの研鑽を重ね、その成果を毎年試演会や公演で発表していますが、本年は本学の創立80周年にあたり、記念行事の一環としてオペラ公演を、来る4月、5月に開催します。演目は、これまで本学であまり上演の機会のなかった、モーツァルト「コジ・ファン・トゥッテ」―全2幕、イタリア語上演、字幕付き―をニュープロダクションで上演します。

指揮は、本学の北原幸男、演出は同

大学オペラ公演のお知らせ

じく恵川智美の両先生。第一線で活躍する両氏のプロフェッショナルな指導の下、関係者一同熱心にこの演目に取り組んでいます。

キャストは、内外のオペラ界で活躍している本学教員・卒業生、学生オーディションの合格者でダブルキャストを組み、ベテランとフレッシュな学生達との共演も見どころとなるでしょう。



▲ 本学オペラ公演「フィガロの結婚」(2006年)

日時 4月29日(祝)15:00/30日(木)18:30、5月2日(土)18:30/3日(祝)15:00
会場 武蔵野音楽大学 ベートーヴェンホール (江古田キャンパス)
●お問合せは、本学演奏部TEL.03-3992-1120まで。

附属江古田音楽教室 オペラ公演のお知らせ

武蔵野音楽大学附属江古田音楽教室の第19回オペラ公演が、1月中旬に江古田キャンパス ベートーヴェンホールで開かれます。

演目は、モーツァルト作曲「魔笛」を原曲とした「ふしぎな魔法の笛」。全キャストからオーケストラまで、小学校1年生から高校3年生までの、総勢約120名の子供たちが出演します。子供たちによるオペラ上演は珍しく、その音楽的完成度の高さのみならず、情操教育に大変優れた効果があると、内外から高く評価されています。

出演する生徒たちは、初回の公演から演出を手掛けている大谷洸子先生

や、指揮の前田 淳先生、その他多くのスタッフのもとで、本番を前に一生懸命練習に励んでいるところです。当日は、子供ならではの純真な演技とアンサンブルを披露してくれることでしょう。



公演は1月11日(日)、12日(祝)両日共12:30/17:00の全4回公演。指定席=A席2,500円 B席2,200円 C席1,800円 ●お問合せは本学江古田音楽教室TEL.03-3994-7536まで。

福井直秋記念奨学金の拡充…「学修奨励金」を新設

武蔵野では、学園独自の「福井直秋記念奨学金」を運営し、毎年武蔵野音大の学生約80名、同附属高校生5～6名に返還義務のない奨学金を給付していますが、平成21年度から、さらにこれを拡充し、大学1年次の入学試験(指定校制推薦入学試験、一般入学試験A日程、同B日程)の成績が特に優れた新入生計約30名に、同奨学金の「学修奨励金」として、入学金に相当する額を給付することとしました。

調査書と入学試験の成績で審査を行い、新入生諸君の入学手続きが終了する4月中旬頃、該当の学生に給付することになります。この学修奨励金も返還義務はありません。

本学園では、今後とも奨学金の拡充に努力を続けていきます。



栄冠おめでとう！（コンクール入賞者等）

（前号までの未掲載分、順不同、敬称略、経歴は受賞時のもの）

- 栗山 和子(本学名誉教授) 瑞宝小綬章受章
- 柄本 舞衣子(平成19年大学卒ハープ専攻 本高等学校卒 本大学院修士課程2年次在学)
パリ国際ハープコンクール2008 第4位入賞(1位なし)
- 中澤 太郎(平成18年大学卒ピアノ専攻 本高等学校卒)
第18回 バルレッタ市若い音楽家のための国際コンクール(イタリア)ピアノソロ部門 カテゴリーG 第3位入賞
- 橋浦 淑子(平成14年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程修了)
パークリー音楽大学(アメリカ)ワールドスカラシップオーディション 合格、奨学生として留学
- 福川 伸陽(留学のため平成14年3月大学2年で中退ホルン専攻 現在日本フィルハーモニー交響楽団在籍)
第77回 日本音楽コンクール 本選 ホルン部門 第1位入賞
- 宇佐美 悠里(大学4年次在学声楽専攻)第62回 全日本学生音楽コンクール 東京大会本選 声楽部門 大学・一般の部 入選
- 山田 祥子(大学2年次在学ピアノ専攻 本高等学校卒)第6回 チェコ音楽コンクール ピアノ部門 第3位入賞
- 志村 侑香(平成20年大学卒声楽専攻)2008年11月ハルモニオオペラカンパニー(ニューヨーク)「EN SAGA」(古譜)Marja役にて出演
- 八尋 三菜子(平成17年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程修了)第145回 日演連推薦新人演奏会(福岡)オーディション(社団法人日本演奏連盟主催)合格、第1位入賞
- 野尻 小矢佳(平成19年大学卒打楽器専攻)平成20年度 川口市芸術奨励賞受賞
- 金子 周平(大学4年次在学ピアノ専攻)第16回 ヤングアーチストピアノコンクール ファイナル ピアノ独奏部門 Fグループ 金賞受賞
- 西方 美紅(平成20年大学卒ピアノ専攻)第16回 ヤングアーチストピアノコンクール ファイナル ピアノ独奏部門 Gグループ 銀賞受賞
- 杉山 由紀(平成20年大学卒声楽専攻 本大学院修士課程1年次在学)第11回 全国「叱られて」歌唱コンクール 一般の部 優秀賞受賞
- 鈴木 清人(大学4年次在学ピアノ専攻)第2回 国際ピアノ伴奏コンクール 第2位入賞
- 矢島 あかね(大学3年次在学ピアノ専攻)第2回 フレッシュ横浜音楽コンクール 大学生S部門 銀賞受賞
- 江頭 美保(平成19年大学卒ピアノ専攻 本特修科在籍)第2回 全日本芸術コンクール 関東本選ピアノ音大・一般部門 第2位入賞(1位なし)、第2回 フレッシュ横浜音楽コンクール 大学生S部門 銅賞受賞
- 杉浦 菜々子(本大学院修士課程2年次在学ピアノ専攻)第2回 夢科音楽コンクール 室内楽部門 第2位入賞、第11回 “長江杯” 国際音楽コンクール ピアノ部門 一般の部A 第4位入賞
- 小島 加奈子(大学3年次在学ピアノ専攻)2008年 アジア国際音楽コンクール 大学生ピアノ部門 第3位入賞
- 矢島 和音(平成20年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程1年次在学)／●矢島 あかね(大学3年次在学ピアノ専攻)第11回 “長江杯” 国際音楽コンクール アンサンブル部門 大学生の部 第3位入賞(1、2位なし)
- 福山 かおり(平成19年大学卒ピアノ専攻 本大学院修士課程2年次在学)第11回 “長江杯” 国際音楽コンクール ピアノ部門 大学生の部 第3位入賞、第15回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 大学院・研究科の部 ピアノ部門 審査員特別賞受賞
- 沖野 聡子(大学4年次在学ピアノ専攻)第15回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 大学生の部 ピアノ部門 第4位入賞(1、2、3位なし)、第55回 徳島県音楽コンクール ピアノ部門 大学・一般の部 優秀賞受賞
- 東野 彩子(平成18年大学卒ピアノ専攻)第11回 “長江杯” 国際音楽コンクール ピアノ部門 一般の部A 第6位入賞、第26回 板橋区クラシック音楽オーディション ピアノ部門 合格
- 佐藤 香(大学4年次在学マリンバ専攻)／●富張 真弓(大学4年次在学打楽器専攻)第11回 “長江杯” 国際音楽コンクール アンサンブル部門 大学の部 優秀賞受賞、第9回 日本アンサンブルコンクール 室内楽部門 入選
- 伊藤 まゆも(大学2年次在学ピアノ専攻)第18回 日本クラシック音楽コンクール 関東地区本選会 ピアノ部門 大学の部 優秀賞受賞
- 二井田 ひとみ(大学2年次在学トランペット専攻)第18回 日本クラシック音楽コンクール 関東地区本選会 金管部門 大学の部 優秀賞受賞
- 鈴木 幸恵(昭和60年大学卒ピアノ専攻 本特修科在籍)第10回 ショパン国際ピアノコンクール in ASIA 近畿・大阪地区大会 コンチェルトC部門 奨励賞受賞
- 守谷 彩加(大学3年次在学ピアノ専攻)第3回 ムジークミルテ・ピアノオーディション 合格
- 加藤 由貴(大学3年次在学サクソフォーン専攻)コンセラー・ヴィヴァン 第23回 新人オーディション 合格
- 今井 千香(本大学院修士課程1年次在学フルート専攻)東京国際芸術協会 演奏家舞台芸術家登録オーディション 準合格
- 福山 恵里香(本高校3年次在学フルート専攻)第9回 大阪国際音楽コンクール 管楽器部門 Age-H 入選
- 鈴木 萌(本高校2年次在学ピアノ専攻)第4回 エリーゼのためにピアノコンクール E部門 部門賞受賞
- 犬飼 まお(附属入間音楽教室在室 東星学園中学校3年生)第62回 全日本学生音楽コンクール 東京大会本選 ピアノ部門 中学校の部 入選
- 横山 希(附属江古田音楽教室在室 お茶の水女子大学附属小学校5年生)第4回 エリーゼのためにピアノコンクール 大賞受賞、C部門 部門賞受賞、第16回 ヤングアーチストピアノコンクール ファイナル ピアノ独奏部門 Cグループ 銅賞受賞
- 横山 洸(附属江古田音楽教室在室 お茶の水女子大学附属高等学校1年生)第4回 エリーゼのためにピアノコンクール エリーゼのために賞、E部門 部門賞受賞
- 田中 舞(附属江古田音楽教室在室 東京学芸大学附属大泉中学校3年生)第8回 アールンピアノコンクール 全国大会 D級 第5位入賞、第15回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 中学生の部 ピアノ部門 審査員賞受賞、第18回 日本クラシック音楽コンクール 関東地区本選会 ピアノ部門 中学生の部 好演賞受賞
- 中山 裕佳(附属入間音楽教室在室 女子学院中学校2年生)第16回 ヤングアーチストピアノコンクール ファイナル ピアノ独奏部門 Dグループ 優秀奨励賞受賞
- 山口 由貴(附属入間音楽教室在室 入間市立黒須小学校2年生)第16回 ヤングアーチストピアノコンクール ファイナル ピアノ独奏部門 Aグループ 優秀奨励賞受賞、第32回 ビティナ・ピアノコンペティション ソロ部門 A1級 東日本埼玉Ⅱ地区、東日本Ⅲ地区 地区本選 入選、第19回 影の国・埼玉ピアノコンクール A部門 入賞
- 篠原 佳瑚(附属江古田音楽教室在室 新座市立大和田小学校5年生)第16回 ヤングアーチストピアノコンクール ピアノ独奏部門 Cグループ 奨励賞受賞
- 田村 茜(附属江古田音楽教室在室 星美学園小学校4年生)第11回 全国「叱られて」歌唱コンクール こどもの部 入賞
- 久保 琴梨(附属江古田音楽教室在室 西武学園文理小学校2年生)第32回 ビティナ・ピアノコンペティション ソロ部門 A1級 東日本千葉Ⅱ地区 地区本選 本選奨励賞受賞
- 大島 弓人(附属江古田音楽教室在室 越谷市立桜井小学校3年生)第15回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 小学生の部 弦楽器部門 審査員賞受賞
- 海老澤 まい(附属江古田音楽教室在室 国府台女子学院小学部3年生)第15回 全日本ジュニアクラシック音楽コンクール 小学生の部 ピアノ部門 審査員賞受賞
- 入岡 美濤(附属江古田音楽教室在室 杉並区立桃井第一小学校3年生)第33回 全国町田ピアノコンクール B部門 入選
- 和泉 茉莉(附属江古田音楽教室在室 千代田区立富士見小学校4年生)第32回 日本ピアノコンクール 全国大会 自由曲部門 入賞、課題曲部門 中級2Bの部 入選
- 大谷 舞(附属入間音楽教室在室 入間市立藤沢北小学校3年生)第18回 日本クラシック音楽コンクール 関東地区本選会 弦楽器部門 小学の部 好演賞受賞
- 遠藤 公宣(附属江古田音楽教室在室 国立学園附属かたばみ幼稚園)第2回 全日本芸術コンクール 関東本選 ヴァイオリン幼児部門 第3位入賞

平成21年度学生・生徒募集のお知らせ

武蔵野音楽大学大学院音楽研究科(博士前期課程・博士後期課程)

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
大学院博士 後期課程入試	平成21年2月12日～ 2月21日消印まで	郵送のみ	平成21年3月9日～ 3月11日

●博士前期課程の募集は締め切りました。

武蔵野音楽大学(音楽学部)

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
1年次 一般入試A日程	平成21年1月16日～ 1月31日消印まで	平成21年 1月30日・1月31日	平成21年2月18日～ 2月23日
1年次 一般入試B日程	平成21年3月6日～ 3月14日到着まで	平成21年3月14日	平成21年3月16日～ 3月18日
3年次 編・転入入試	平成21年1月22日～ 1月28日消印まで	郵送のみ	平成21年2月10日～ 2月12日

- 一般入試A日程の受験では、国語・外国語(英または独)について、入試センター試験を利用できます。
- 一般入試B日程の受験では、国語・外国語(英または独)について、入試センター試験の受験者に限ります。

武蔵野音楽大学附属高等学校(音楽科)

	出 願 期 間		試 験 期 間
	郵 送	窓 口	
附属高等学校 推薦入試	平成21年1月14日～ 1月16日必着	郵送のみ	平成21年1月22日
附属高等学校 一般入試	平成21年1月21日～ 1月28日必着	郵送のみ	平成21年2月10日・ 2月11日

- 入学試験の詳細については、各入学試験要項でご確認ください。
 - 上記、入学試験は、江古田キャンパスで実施します(ただし附属高校推薦入試のみ、入間キャンパスで実施)。
 - 各入学試験要項は、江古田キャンパスで取り扱っています。要項は無料ですが、郵送をご希望の場合は、氏名、住所、電話番号、および附属高校、大学1年次、大学3年次編・転入、大学院の別を明記し、切手(高校は240円・大学1年次は390円、大学3年次は240円、大学院は390円)を同封の上、下記までお申し込みください。
- 武蔵野音楽学園広報企画室
〒176-8521 東京都練馬区羽沢1-13-1 TEL.03-3992-1125 学園のホームページ、携帯サイトからも請求ができます。
http://www.musashino-music.ac.jp/ 携帯サイト http://musaoon.jp/

音楽教室(江古田・入間・多摩)入学試験スケジュール

受験資格(学年は平成21年3月末現在)

江古田・入間・多摩音楽教室	導入コース……………3才 初級コース……………4才から小学校1年生まで 中級コース……………小学校2年生から小学校6年生まで 上級コース……………中学校1年生から高等学校2年生まで
受験コース 江古田・入間・多摩音楽教室	武蔵野音楽大学附属高等学校受験……………中学校1年生以上 武蔵野音楽大学受験……………高等学校1年生以上
エクセレンス・コース (将来音楽家をめざす、児童、 生徒のための高度なコース)	5才から高等学校2年生まで (江古田音楽教室のみに設置しています)

入学試験 平成21年3月8日(日) (各教室にて)
●ただし、エクセレンス・コースの入学試験は江古田音楽教室で行います。

願書受付 平成21年2月12日(木)～2月28日(土) 江古田・入間・多摩音楽教室
試験科目 実技・ソルフェージュ・面接。
未就学児(3才～5才)は面接のみ。
エクセレンス・コースの未就学児は、実技・ソルフェージュの試験を受けてください。
音楽をはじめ勉強される方は、音楽教室にご相談ください。
要項請求 ご希望の音楽教室へお申し込みください(要項・送料とも無料)。

※その他詳細については、下記へお問い合わせください。
江古田音楽教室 TEL.03-3994-7536 入間音楽教室 TEL.04-2932-1111
多摩音楽教室 TEL.042-389-0711

●表紙の顔

森谷真理さん



淑徳与野高等学校出身。武蔵野音楽大学卒業、同大学院修士課程修了。マネス音楽院プロフェッショナルスタディー・ディプロマ取得。

メトロポリタンオペラ・ナショナルカウンスル・オーディション入賞。ヴェロニカ・ダン国際声楽コンクール1位。カーディフ国際声楽コンクール(日本代表)コンサート賞受賞など、世界各地のコンクールで上位入賞を果たしました。

出演オペラは、2006年、パームビーチオペラにて＜魔笛＞の夜の女王役で全米デビュー、同年大晦日の日には同役でメトロポリタンオペラハウスにてデビュー。これはソプラノ歌手で蝶々夫人以外の役での出演は日本人初となり、日本でも多くのメディアに取り上げられ話題になりました。その他主な経歴として、ピッツバーグオペラ、ポートランドオペラ、オペラアイルランド、グランドボーン音楽祭ツアー、ナショナルシンフォニーオーケストラ(ワシントンDC)、RTEコンサート・オーケストラ(アイルランド)などに出演、共演するなど世界を舞台に活躍をされています。

今後の予定として、タルサオペラで＜愛の妙薬＞のアディーナ役、オペラアイルランドで＜ドン・ジョヴァンニ＞のツェルリーナ、＜カプリエティ家とモンテッキ家＞のジュリエッタ、アルゼンチンのコロ劇場にて＜バラの騎士＞のゾフィー役での出演が決まっています。

編集後記

あけましておめでとうございます。

新年号を手にとられて、おや、と思われた方も多いことでしょう。本誌はこれまでのB5版からA4版サイズへと変わりました。

1987年4月の発刊以来22年間の歴史の中で初の変更です。本学園の発展とともに、本誌内容も充実してきたことから大判化しました。

ますます内容の豊かさを考え、読みやすいデザインでお届けしたいと思います。一層のご指導をお願い申し上げます(編)。

平家琵琶

田村皓司作 日本 全長 81cm



「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きあり…」—有名な「平家物語」の冒頭の一節である。移ろうからこそはかなく、はかないからこそ美しいという、日本人が古くから大切にしてきた「無常の美」の世界が繰り広げられている。

平家琵琶とは、この「平家物語」を琵琶法師が語るときに用いる琵琶のことで、その音楽は「平家(平曲)」と呼ばれている。その歴史は古く、鎌倉時代に遡るとされているが、当初は小型の楽琵琶を転用していた例も多くみられる。しかし、楽琵琶との相違点としては、柱が1つ多くなり5つとなったこと、また、勘所を作る柱の位置が異なっていること、写真の楽器のように撥面に月形の装飾がつけられている場合が多いこと、撥の先端が尖っていることなどが挙げられる。

琵琶法師は、活動組織として数々の「座」を組んできたが、中でも平家琵琶を主に用いる「当道座」は、江戸時代になると幕府の庇護のもと次第に勢力を強め、その他の琵琶法師たちとの対立を深めていった。その結果、当道座は、自らは平家琵琶とともに三味線を用いる一方で、座外の琵琶法師たちには三味線の使用を禁じ、琵琶にも多くの制約を加えた。座外の琵琶法師たちは、三味線的要素を琵琶に反映させて新たな楽器を生み出し、演奏姿勢を工夫することで、必死に対応していったのである。つまり、三味線のように、自由な音高を得るため柱を高くしたり、細やかな手の動きに対応するために、より左手の負担が軽くなる斜めの構え方へと変化していったものと考えられている。そしてこれらの変化が盲僧琵琶へ、また後の近代琵琶へと受け継がれていくことになった。

(武蔵野音楽大学楽器博物館所蔵)

❧ 目 次 ❧

明けておめでとうございます 福井直敬	❶
今、音楽の原点を考える 一柳 慧	❷
音楽の万華鏡 扉絵に描かれた空間の音楽 寺本まり子	❸
海外音楽事情 一つのスタイルが主流である時代は終わった インゴ・ゴリツキー	❹
音楽余話 リヒテルとの出会い コンスタンティン・ガネフ	❺
MUSASHINO NEWS ❶ 実り豊かな秋の公開講座・コンサートシリーズ ❷ 豊かな音色と笑顔に彩られたミューズフェスティバル ❸ 管弦楽団合唱団&ウィンドアンサンブル演奏会 ❹ ベートーヴェンホール、パイプオルガン修復 ❺ 創立80周年記念、大学オペラ公演のお知らせ ❻ 附属江古田音楽教室オペラ公演のお知らせ ❼ 福井直秋記念奨学金の拡充…「学修奨励金」を新設 ❽ 栄冠おめでとう! (コンクール入賞者等) ❾ 平成21年度 学生・生徒募集のお知らせ ❿ 平成21年度 音楽教室入学試験スケジュール	❻

武蔵野音楽大学大学院

博士前期課程・博士後期課程

武蔵野音楽大学

武蔵野音楽大学附属高等学校

武蔵野音楽大学第一幼稚園

武蔵野音楽大学第二幼稚園

武蔵野音楽大学武蔵野幼稚園

附属音楽教室 江古田・入間・多摩

❧ 発 行 ❧



創立八十周年

学校法人 武蔵野音楽学園

江古田キャンパス ●〒176-8521 東京都練馬区羽沢1丁目13-1

TEL.03-3992-1121 (代表)

入間キャンパス ●〒358-8521 埼玉県入間市中神728

TEL.04-2932-2111 (代表)

パルナソス多摩 ●〒206-0033 東京都多摩市落合5-7-1

TEL.042-389-0711 (代表)

<http://www.musashino-music.ac.jp/>

2009年1月10日発行 通巻第88号



携帯サイト
<http://musashino.jp/>